



—北アフリカ地域ニュース—

リビア：ライス米務長官の訪問

(9月6-7日付現地報道)

9月5日、ライス米務長官が、米務長官としては1953年以来55年ぶりにリビアを訪問した。

1. カダフィ指導者との会談

- (1) ライス米務長官は、1986年に米空軍機により爆撃され、養女が犠牲となった邸宅でカダフィ指導者と会談した。白いローブに身をまとった同指導者は、ラマダーン期間中には男性は女性に触れるべきでないとのイスラムの伝統に従い、ライス米務長官との握手は避け、右手を胸に当てて歓迎の意を表した。会談では、スーダン・ダルフル問題、中東及びテロに関する問題が協議された。
- (2) カダフィ指導者は、米国のアフリカに対する軍事的影響力に懸念を抱いており、米国のアフリカ大陸での軍事基地の設立は、アフリカの植民地支配に繋がると言及して警戒感を露にした。これに対して、ライス米務長官は、米国はアフリカでの軍事基地やプレゼンスの設立を模索しているわけではない旨を述べた。
- (3) 同長官は、「本日の会談は、米国がリビアとの関係構築に積極的であることを証明するものである」、「両国市民は、お互いのことをもっとよく知ろうとしている。より多くのリビア市民が米国へ留学することになるだろう。」、「多くの米国企業は、リビア市場への参入に熱心である。」と述べた。

2. シャルガム外相との会談

カダフィ指導者との会談に先立って、ライス米務長官はシャルガム外相と会談し、現在の国際社会及び中東を取り巻く各種の問題や、石油を中心とした経済及び教育分野での協力について話し合った。又、ライス米務長官は、リビアの人権問題を議題として取り上げた。

3. 外相会談後の共同記者会見

- (1) ライス米務長官は、「我々は、良いスタートを切れたと思う。これは、ほんの始まりに過ぎないが、両国が前進への道を確認しつつあることは喜ばしい。」、「ワシントンには、永遠の敵を有しているわけではないことが証明された。」、「在リビア米国大使は間もなく派遣されるであろう。」と述べた。
- (2) シャルガム外相は、「ライス米務長官のリビア訪問は、両国、そして世界の変化を証明するものである。現在、両国間には、理解と対話と協約が存在する。」と述べた。
- (3) 尚、米務省に拠れば、米国は、現在、リビアとの間で軍事に関する覚書を交渉している一方で、5日に予定していた文化及び教育に関する合意については、リビア側が幾つかの文言の変更を要求した為、延期された。